

「嶋田繁太郎大将備忘録」

菊田 慎典

海軍大将・嶋田繁太郎（明治十六年生―昭和五十一年没）の備忘録・日記類の原本複製史料が、防衛研究所戦史史料閲覧室において一般に公開されているので簡単に紹介する。

一 経緯

昭和四十八（一九七三）年三月、防衛研修所戦史室（現・防衛研究所戦史部）は、嶋田大将本人から元海上幕僚長内田一臣氏を通じて原本を借用し、御了解を得て本史料類を複製した。

爾来、各冊の表に「取扱注意・室外秘」と朱筆された同史料（口絵写真参照）は、戦史編纂官など関係者だけが閲覧できる重要史料として保管され活用されてきた。

最近、調査研究のため嶋田史料を閲覧させてほしいとの要望が主として学術研究者から多く寄せられるようになり、遺族承諾などの諸手続きを経て、平成十一年四月から全面公開される運びとなったものである。

二 目録

(1) 「備忘録 第一」軍令部次長 昭和十年十二月―十一年十二月

- (2) 「備忘録 第二」軍令部次長 昭和十二年一月―十二年九月
(3) 「備忘録 第三」軍令部次長 昭和十二年九月―十二年十一月
(4) 「備忘録 第四」第二艦隊司令長官・呉鎮守府司令長官・支那方面艦隊司令長官 昭和十三年一月―十六年三月
(5) 「備忘録 第五」支那方面艦隊司令長官・海軍大臣 昭和十六年四月―十九年五月
(6) 「欠番」
(7) 「備忘録 第七」その他備忘録・メモ等 昭和十六年十月―二十年十二月
(8) 「無標題備忘録」大正時代から終戦後まで 昭和十五年
(9) 「日記」 昭和十五年
(10) 「日記」 昭和十六年
(11) 「日記」 昭和二十一年・二十二年
(12) 「極東軍事裁判中参考資料並びに回想」

三 史料的価値

日本海軍の軍令に関する公文書類は終戦の際に焼却処分され、そのほぼ全部が消滅した。それゆえに、戦後、戦史部が『戦史叢書』全一〇二巻を公刊するにあたっての史料収集と編纂の困難さは、筆舌に尽くし難いものがあったといわれている。

内田氏が嶋田大将から原本を借用し本史料類を複製したのも、もちろん、右の戦史編纂事業の一環として行われたのであった。その成果は、同氏が末國正雄氏の助言、ならびに中村悌次氏の支援を得て執筆した『戦史叢書 大本営海軍部 大東亜戦争開戦経緯』へ1へ2へ巻に顕わされている。また、本史料類は同上書の本論中頻繁に引用され、目録のすべてが引用参考文献一覧に記述された。このことから判るように、「嶋田繁太郎大将備忘録」は、重要史料が多く記されており、その史料的価値はきわめて貴重なものがある。

以上、第一級史料に位置するこれら諸記録は、現在、防衛研究所戦史史料閲覧室において誰もが閲覧できる。

〔参考〕

嶋田繁太郎大将主要軍歴

明治三十七年十一月 海軍兵学校（第三二期）卒業

大正六年十二月 イタリア大使館付武官

大正十三年十二月 海軍大佐

昭和三年十二月 比叡艦長

昭和四年十一月 海軍少将

昭和五年十二月 第一艦隊兼聯合艦隊参謀長

昭和七年十一月 軍令部第一班长

昭和九年十一月 海軍中将

昭和十年十二月 軍令部次長

昭和十二年十二月 第二艦隊司令長官

昭和十三年十一月 呉鎮守府司令長官

昭和十五年五月 支那方面艦隊司令長官

十一月 海軍大将

昭和十六年九月 横須賀鎮守府司令長官

十月 海軍大臣

昭和十九年二月 兼軍令部総長

昭和十九年八月 軍事参議官

昭和二十年一月 予備役